



ビオトープ・ニュース047

発行日 2012/11/04

発行：日本ビオトープ管理士会 徳島支部
 事務局：徳島市山城町東傍5-281 新弘測量設計㈱内
 事務局長：東條芳顕 TEL：088-622-5688

■ビオトープ・サロン 水路や里山の管理手法のヒントが河川プールに！?

今号は、淡水魚の生息地である用水路や河川の研究をされている田代さんからご寄稿いただきました。（編集部）



↑ 山口県の瀬田川河川プール



↑ 大分県の白山川河川プール

【驚きの河川親水施設：河川プール】

寄稿：田代優秋（工学博士）

（徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター長）

河川プール——いろいろ疑問が湧いてくる言葉ですが、そうなんです「川の中にプール」があるんです。誰でも「えっ、コレ埋まらないの?」「洪水で壊れないの?」「ホントに泳いでる人いるの?」など不思議じゃありませんか?

この河川プールに一義的な定義はありませんが、「河川の一部を仕切りプールとしたもの、あるいは河川の高水敷上に設けられたプールの総称」とされています（島谷 2009）。西日本に多く分布していて、九州地方（特に大分県）と山口県に多いのが特徴です。中でも大分県大分市にある河原内川河川プールは7月20日～8月31日までのわずかな期間に2万人も利用者がいるそうです（大分市ホームページ）。そして、地元住民から愛されきちんと維持管理がなされているそうです。

そもそも、なぜ川そのもので泳がずに川の中に構造物としてプールを作ったのか。一番最初に考えた河川土木技術者の発想のきっかけはまだ謎です（ただ、一番最初に作ったのは山口県河川課とのこと）。このように分からないことも多い河川プールですが、これを「地域住民が自分たちの地元の河川に愛着を持って利用し、さらに主体的な河川管理まで促進する社会装置」と捉えて調査研究を進めています。そうすれば、今、共同管理ができず社会問題化している農業水路やため池、里山の管理手法に何らかのヒントになるのではと考えています。

そこで、河川プールに関する情報を集めるために「日本全国の河川プールマップ」(<http://pool.pjm.jp/>)というWeb サイトを作成しました。これまで集めた分布情報もご覧いただけます。サイトに掲載されているもの以外に、もし「ここにも河川プールがあるよ」といった分布情報をお持ちの方は、ぜひご一報下さい。徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター 田代優秋 (tashiro.yushu@gmail.com, 088-679-2238)

■参考文献：島谷幸宏（2009）河川プール，川の百科事典，丸善株式会社，P.238

■ビオトープ・サロン 2020年徳島の未来に向けて…みんなの思いを組織の使命に！ No.4

046号に続いて「2020年徳島の未来に向けて（2010年3月）」の第4弾を紹介します。（編集部）

【十年先を明るく展望】

記者：飯山直樹（会員）

今よりも生きものをめぐる楽しい取り組みが増えていきます。生きもの好きな人も増えて、生活のなかに自然があって、例えばすぐに俳句が詠めるような日常ができていくといいと思います。日常の生活のなかに上手く自然を取り入れたり、生きものとふれあうことができると生活が豊かになることは、たくさんの方がなんとなく気がついているので、そうやっていくような気がするのです。

その点では、徳島は自然が多いと言われていきますから、イイ線いっています。そして実際に、生活のなかで生きものや自然を感じ続けるのは、かなり豊かなことだと思います。それには、積極的に利用したり、意識している方が具合がよいように感じます。例えば芸術的な生活や食文化なども、自然が支えているようなところに気がつきますから、このあたりのつながりを意識すると、楽しかったり面白かったり感心したりもできて、食べ物の味もかわります。こんな感じで考えてみると、自然や生きものを上手に守れるか?というところは、人の気分や気持ちの持ち方が大切だということになりそうです。

最近、身のまわりでは、生活の利便性や開発を追いかけつづける動きが強いために、自然が犠牲になっていることが目立っているように感じます。そのところを解決するキーワードがビオトープだと思います。あっ、ビオトープはちょっとコトバが難しいかもですね。もう少し皆さんに知って利用してもらえるように頑張ります。（2010年3月）



写真上：徳島のブナ林
 写真下：ブナの山の恵みに感謝する祭りの様子

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう！

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。 (編集局)

【計画部門1級記述問題：正答と解説は次号で紹介】

問 047：池タイプのビオトープをつくる話しが持ち上がり、住民にも参加してもらい、討議を重ねて合意がなされた頃、子どもの安全について追加意見が出されました。それによれば、水辺をつくと子どもが当然近寄ってくるが、池に落ちると危険であり、計画を中止するか、つくるにしても侵入防止のフェンスを張り巡らせる必要があるのではないかというものでした。最近話題になっている安全に関することでもあり、住民間で意見が分かれて行政も困っています。どのように方向付けをすればよいか、どのように計画・設計を行い、住民の合意形成を進めればよいか、400字以内で説明しなさい。

■前号046の正答「4」

1. 粗朶積みとして使用する枝や木の幹は、種類を問わず、太さも様々なものを使用する。昆虫類の越冬場所の利用を考える場合には、直射日光があたらず温度変化の少ない場所に設置することが望ましい。
2. 生垣に使用する樹木は地域の在来種を用い、種類は単一ではなく、いろいろな種類を混植した方がよい。
3. 石積みはトカゲやハサミムシなどの小動物が利用する。材料には割栗石や自然石、見た目は悪いがコンクリート殻でもよい。石と石の隙間が小動物の隠れ処になるように、あまり小さな石は使用しない方がよい。
4. 同一形態の野鳥の巣箱を多数設置することは、特定の種だけを増やす可能性があり、自然生態系のバランスを崩すことになりかねないので避けた方がよい。尚、巣箱に営巣するのは木(コゲラは枯れ木)の幹に穴をあけるケラ類、コゲラの巣の跡を利用するカラ類の他、洞を利用するフクロウの仲間など限られており、利用する巣箱の形や大きさだけでなく、入り口の形や大きさも鳥の種類によって異なる。
5. 蜂宿として積み重ねるか、あるいは束ねた篠竹は、主にドロバチやハキリバチの仲間が利用する。その際、ハチは自分の体なった材料を選ぶので、使用する篠竹は、なるべく太さの違うものを集めるとよい。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■ビオトープ・サロン 雑学コーナー 生物多様性保全は問題多様性改善

(編集局)

【自然保護の第一歩は“野性生物に餌を与えないこと！”とは言うけれど？】

野性生物とのほほえましいふれあいは、しばしば、新聞で取りあげられます。先日もヤマガラスの記事が紹介されていました。鳥獣保護の管理者のコメントも紹介され「餌をやるのは違法ではないが絶対につかまえないで欲しい」とのこと。つまり、「捕獲は法律で禁じられているが、給餌は違法ではない」ということ。本当は「しかし、餌をやることは謹んで欲しい」と付け加えたかったことだろうと推察します。

ペットも元は野性生物だったわけですが、野鳥を庭に呼び込むための給餌台の設置とか巣箱掛けとか、自然に優しい行為のように思えます。しかし、これらは人間の一方的な都合であって、自然生態系を損なう要因にもなります。近年は野生との距離が益々近くなり、善意のはずの行為が悲劇を招くことも考える必要が出てきました。

観光目的に餌付けされたサルや水鳥の楽園、公園などでのドバト(外来種カワラバトの野生化)への餌やり等々、一見して良いことのように見えます。しかし、一方で、新たな危機が顕在化し始めました。観光客が不用意に与えた餌がきっかけとなり、観光道路に群がる野生ザルの襲撃やハトの糞害などです。また、人間との摩擦だけでなく、人間と野性生物の距離が近くなることで、様々な人獣共通感染症も心配されています。我が国では、トリインフルエンザの流行などがその代表格です。ナベツルによる農業被害の拡散防止のための餌付けで局所に集中、個体の集中化が大量死のリスクを高めることになり、分散化の取り組みも始まっています。しかし、容易に元に戻すことはできません。

■みんなの“たからもの” 進化や変異はこうして始まった？

寄稿：Kさん



【潜水コオロギ…新種コオロギ発見！？】

人の気配に驚いたコオロギが小さな池に飛び込みました。泳ぐと思いきや、なんと、石を伝って自らの脚で水中へ。すぐには上がってくると見ていましたが、根付けたのは私でした。

暇があれば、何分間潜水してられるのかの実験につきあってもらいたいコオロギ君でした。

昆虫に限らず、私たちも含め生物は計り知れない様々な能力の持ち主かもしれません。ふと、ガラパゴスのウミグアナをお思い浮かべました。しかし、考えてみれば、ミズカマキリやタガメ、ゲンゴロウなど、水生昆虫もたくさんいます。彼らは、陸上生活から再び水中生活に戻ったと言われています。

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報はもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。 ふるってご参加ください！ 編集局

【E-mail : kanv@nifty.com URL : <http://biotopetokushima.yu-yake.com>】